

1984

川 越 石 窯 址

長野県佐久市前山川越石窯址試掘調査報告書

昭和59年3月

佐 久 市 教 育 委 員 会

例　　言

- 1、本書は、昭和58年10月5日から同年10月25日にわたって、予備調査された長野県佐久市大字前山字川越石に所在する前山焼の川越石窯址の試掘調査の報告書である。
- 2、本調査は佐久市教育委員会が実施した。
- 3、本調査は調査団を組織し、団長に井出正義、発掘担当者に林幸彦、調査員に佐久考古学会員また、地元前山地区の方々、特別指導に岩野見司、赤羽一郎氏の協力を得て実施した。
- 4、本書の挿図は調査員が作成し、トレスは大井和子がおこなった。
- 5、本書の執筆者は文末に記す。
- 6、本書の編集は森泉かよ子が行い、林幸彦、井出正義が校閲した。
- 7、本遺跡の資料は佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

また本調査にあたり愛知県陶磁資料館学芸員赤羽一郎氏、長野県教育委員会文化課指導主事の鶴道哲章・臼田武正両氏には適切な御指導をいただきました。さらに、土地所有者の茂木平一氏には多大な御理解をいただきました。記して厚く御礼申し上げます。

凡　　例

- 1、川越石窯址は "MKS" と略し、川越石1号窯址は "MKS 1" とした。また、前山焼の名称については、從来 "川越石(かわごし)焼" と通称されていたが、小林多津術氏の提唱により大字名をとって "前山焼" と改称されている。今回は製品については前山焼と使用し、窯址については小字名で "川越石窯址" とした。
- 2、川越石1号窯址の実測図は、縮尺1/80である。

目 次

例 言

凡 例

目 次

挿図目次

I	発掘調査の経緯	1
1、	調査に至る動機	1
2、	調査の概要	2
3、	調査日誌	2
II	遺跡の環境	3
1、	自然環境	3
2、	歴史環境	4
III	前山焼の歴史	7
IV	層 序	8
V	遺構と遺物	9
1、	川越石1号窯址	9
VI	まとめ	12
引用参考文献		

挿 図 目 次

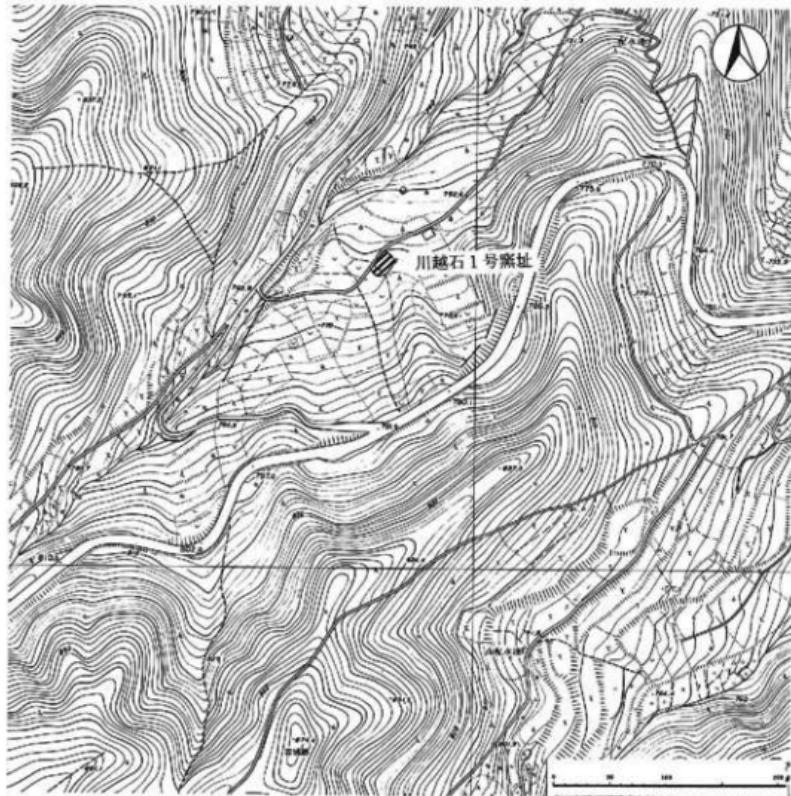
第1図	川越石窯址の地形及び発掘区設定図	1
第2図	佐久の地形模式図	4
第3図	周辺遺跡分布図	6
第4図	基本層序模式図	8
第5図	川越石1号窯址実測図	10
第6図	川越石窯址全測図	12

I 発掘調査の経緯

1. 調査に至る動機

昭和58年1月に茂木平一氏が、果樹園内に作業小屋を建てるため削平したところ、1号窯址の胴木間部が露出し、窯元の末えいである箕輪太七郎氏に連絡し、貴重な資料であることから市教委に一報せられたものである。

佐久市教育委員会では、長野県教育委員会文化課の指導を受けながら保存処置を講じることとし、委員に岩野見司、赤羽一郎両氏を迎へ、発掘担当者には林幸彦があたり、昭和58年10月5日より遺構確認のため試掘調査を実施する運びとなった。



第1図 川越石窯址の地形及び発掘区設定図

2、調査の概要

遺跡名 川越石窯址
所在地 佐久市大字前山字川越石1124-9、1132
発掘期間 昭和58年10月5日～同10月25日
検出遺構 近世陶器窯址1基
出土遺物 近世陶器片、匣鉢等焼道具
調査事務局
教育長 戸塚平一郎（58年10月退任） 大井昭二（58年11月就任）
教育次長 大井昭二（58年10月退任） 森泉郁太郎（58年11月就任）
社会教育課長 並木進
〃 係長 相澤幸男
〃 係 関本功、林幸彦、細萱健一（58年7月就任）
社会教育指導員 森泉かよ子
社会教育臨職 小山岳夫（58年7月就任） 三村美穂子（58年12月退任） 大井和子（59年1月就任）

調査団の組織

会長 神津武士 副会長 戸塚平一郎（58年10月退任） 大井昭二（58年11月就任）
委員 岩野見可 赤羽一郎 由井茂也 小池宗美 箕輪忠次郎 平林富三 大井隆男 木内寛
白倉盛男 並木藤一郎 藤沢平治 箕輪太七郎 茂木平一
調査団 団長 井出正義 調査員 森泉定勝 佐々木宗昭
副団長 藤沢平治 大井隆男 井上行雄 原田政信
担当者 林幸彦 三石延雄 三石宗一
主任 小山岳夫 森泉かよ子 鳥田恵子

3、調査日誌

10月5日～7日 調査に先立って、表面にみられる製品片、匣鉢の回収。
10月15日 調査団打ち合せ
10月16日 トレンチ設定し掘り始める。焼成室の床面確認のため上方から掘る。
17日 第1焼成室付近の掘り下げ。規模確認のため東西にもトレンチ設定し掘り下げる。
18・19・20日 トレンチを掘り下げ遺構を検出す。
21・22日 土層断面図・平面図を作成し、写真撮影し終了する。
25日 試掘地点の埋め戻し。

II 遺跡の環境

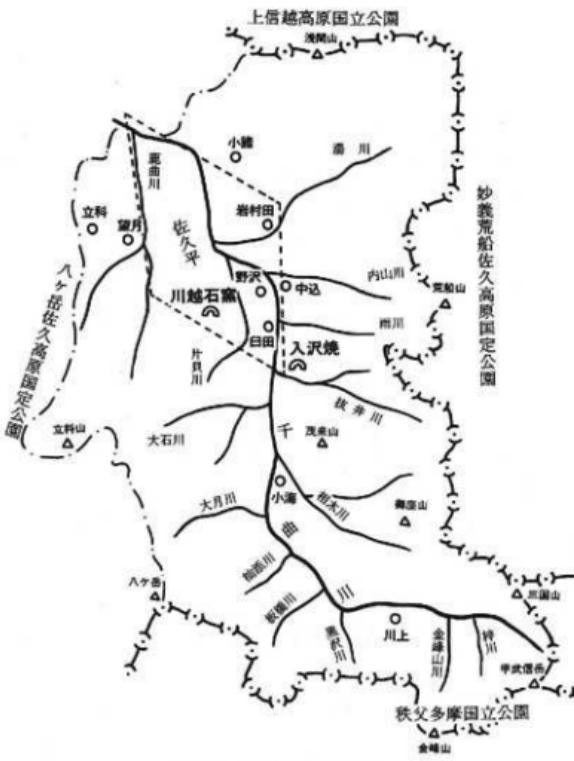
1、自然環境（地形・地質）

佐久平は千曲川の上流標高約700m、南北約20km・東西最大約10kmの長菱形の高原盆地で東側群馬・長野県境は関東山地の最西北端部の延長が佐久山地となり所によっては千曲川沿岸まで迫っており、その北部は妙義荒船佐久高原国定公園・南部は秩父多摩国立公園となって埼玉・山梨県境まで続いている。西側はホッサマグナ（日本中部地溝帯）中心部に噴出隆起した八ヶ岳立科山火山列が諏訪郡界を形成し、ここも八ヶ岳中信高原国定公園となっている。北側は浅間火山を主峰とした上信火山帯が群馬県との境を作っており、上信越国立公園の南端部となっている。

従って佐久平は千曲川の流出する西北部小県上田市方面だけが平地続きで他の東西南方向は何れも山地に閉まれた地域へ出入するには全て峠越しをしなければならなかつた。群馬県側17・埼玉県側2・山梨県側6・諏訪郡側5の大小の峠路があつた。この困難な交通輸送事情のため、良質ではないが陶器など佐久平の中で生産せざるを得なかつた要因でもあつたのであらう。

千曲川は甲武信ヶ岳（2468m）から源を発し、最上流部の川上村地域では西流し、南牧村に入ると岩壁にかこまれた峡谷を北流し、小海町附近でようやく谷巾を広め、佐久町附近では河床の標高750m内外となり両岸は次第に平地が広がり佐久平はこの辺から開け、ほぼ北流して小諸市布引で標高550mで長菱形の長い対角線に大体一致する。佐久市附近が東西の巾が最も広く菱形の短い対角線の部分にあたり佐久平の中心である。

前山焼の原土採掘地佐久市大字前山字上野・窯址所在地同前山字川越石はこの佐久平の広い部分の西端の段丘上に立地している。この前山地籍の基盤は洪積初期淡水堆積の相浜層が分布し、その上に旧八ヶ岳立科火山の第一期噴出物の凝灰角礫岩が緩傾斜で厚く重なつて段丘状を呈しており地表はその後の火山噴出物の火山灰の風化分解した赤土一（ローム）一が2～3mの厚さに被っている。八ヶ岳火山の噴出にかかる赤土ロームについては詳細な分布・成分等に関する調査研究は充分行き届かず不明の部分が多いことは残念であるが八ヶ岳立科山麓から千曲川右岸佐久山塊一帯の佐久地方に広く分布している。原地形や噴出口からの距離の差によって厚薄・粒差・成分鉱物・水中空中堆積による成層状態には部分的差異は認められるが大部分は黄褐色又は赤黄色浮石の細砂が風化分解した粘土の成層で一部には細粒浮石がそのまま風化した鹿沼土状の薄層を含んでいる処もあり水中堆積ではナメ層を作っている処もある。これらの粘土は粘性は強く粘土細工で成形して焼くと素焼き木鉢のように鉄分による赤色の強い素焼が出来る。ところが川越石産の前山焼の原土は現地では一見白色粘土状で浮石砂粒は含まず粘性の強い粘土で素焼にしても耐熱度も高く焼きしまりもよく擂鉢に用いられているように硬く佐久の他産地のものより鉄分によ



第2図 佐久の地形模式図

る紅色は薄い。この様な陶土は佐久地方では他に見出されていない。酸性火山岩の火山灰中の長石の分解物と考えられるが全体の分布・成因は調査不充分で明らかにされていない。分布は小範囲で部分的であるようである。

佐久地方では古代の御牧ヶ原・相浜などでの登窯による須恵器の窯址が発見されており、明治以降曰田町勝間・離山、佐久市太田部・樋村・相浜、浅科村下原等で日本瓦を焼いたがこれ等の原土は沖積期の河川沿い凹地に大洪水の遊水地に濁水の粘土の沈積したもので微粒子粘土の原料は現在も活用を続いているものもある。

（白倉盛男）

2. 歴史環境

前山地区は佐久平沖積平野の中央部の西辺に位置し、背後に蓼科山系の広大な裾野を負い、前面には片貝川、千曲川が流れていて、豊かな佐久平の水田地帯が展開している。

平野と山地の接点に位置する前山は、古来農村立地としてもっとも恵まれた条件をもっていた。したがって周辺には縄文、弥生、古墳、奈良、平安各時代にわたって遺跡が多い。特に平坦で水流のおだやかな片貝川流域は、佐久平の古代稻作のもっともはやく発達したところで、前山地区の南北には大門下、後沢等の弥生時代中・後期にわたる大遺跡がある。

片貝川をはさんで東方前面の自然堤防上には、桜井、三塚、取出、跡部、野沢の諸集落の間に、弥生時代中期から奈良、平安時代に及ぶ、北桜井、市道、三塚、中道、儘田等の、佐久平の代表

的遺跡が分布している。

5世紀半ばには、この地に允恭天皇の皇后忍坂大中姫の御名代部として刑部が設置され、大化の改新(645)によって公地公民制がしかれると刑部郷となつた。さらに律令制が崩壊し、荘園化がすむにつれて、この地に伴野荘が成立した。鎌倉時代には小笠原氏が地頭としてこれを支配するようになった。

建武2年(1336)の伴野荘郷村の年貢注進状には「伴野上中下三ヶ村千貫文」と記されていて、前山地区は伴野上中下とよばれ、伴野荘内の中心的な有力郷村であったことが推察される。

戦国時代には伴野氏はここに前山城を築いて、岩村田の大井氏と佐久平の領有を争つた。文明16年(1484)大井氏は北信の村上氏の侵略をうけて滅亡したが、伴野氏は武田氏と結び、天文9年(1540)武田氏の佐久郡侵攻がはじまってからは、前山城は武田信玄の佐久郡経略の基地となつた。

江戸時代後期には、前山村と中村、下村となり、幕府領と田野口藩領に分かれたが、前山村は佐久群有数の米作地帯であると共に、背後の蓼科山麓一帯43ヶ村入会の広大な山林原野の山元村でもあった。この入会山のうち、南西約3kmの上野地籍に陶器原料となる良質の白粘土の地層があった。

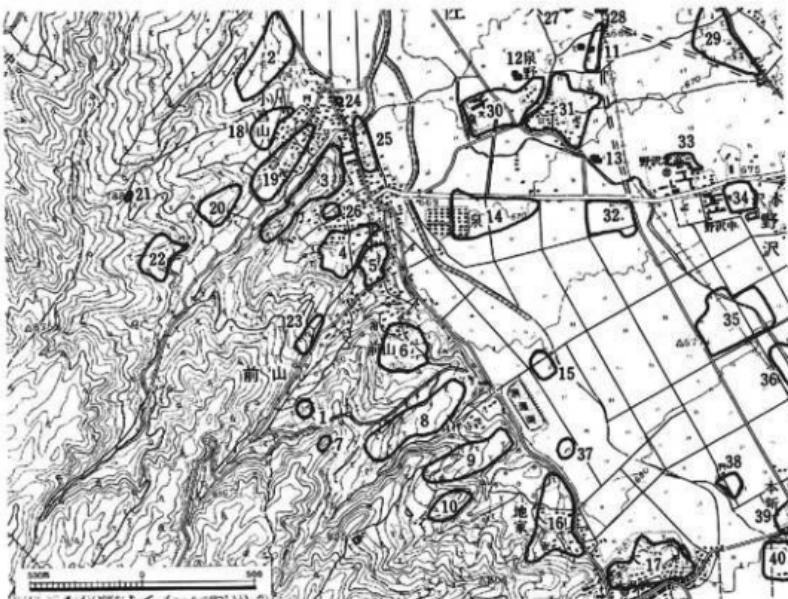
江戸時代中期以降貨幣經濟の進行に伴ない、農村生活も幾分の向上をみることになり、陶器の需要も増加してきたものと思われる。村役人を勤めていた立科屋寅輪忠左衛門はこの状況を察して、上野の白粘土に注目し、薪の豊富な地の利を生かして、代々蓄積した豊かな私財を投じて窯業にふみきった。

技術者としては美濃から陶工を招いて焼いたと伝えられているが、ソバ釉を基調とする前山焼は、唐津など九州系に近いものではないかという見方もある。

上野から白粘土を馬に積んで、約2kmほど下の川越石地籍に窯を築いて運び、溪流を利用した水車で土をこね、付近の作業場で成形して焼いた。

開窯は寅輪忠左衛門が村役人を勤めていた、同家全盛期と思われる宝曆から寛政の間(1751-1800)とみられる。「立科屋寅忠、文化四歳(1807)卯二月」とクギ彫りのある壺は、川越石(前山)窯の最高潮期を示すものと思われる。しかし「よいものを焼いたが高くて売れず」、現在窯跡に多くみられるような雑器生産を主とするようになった。しかしそれでは採算がとれず、新しい販路の開拓もできないままに、文政期(1818-1829)閉窯のやむなきに至つたものと思われる。

前山焼(川越石焼)は江戸時代佐久地方に於ける唯一つの民窯であって、その操業期間は40~50年間の比較的短期間ではあるが、すぐれた民芸としてその作品も現存している。佐久地方の風土が生みだした貴重な文化財であり、前山の自然と歴史的環境の所産である。 (井出正義)



第3図 周辺遺跡分布図 (25,000分の1)

第1表 周辺遺跡一覧表

No	遺跡名	所在地	立地	國	都	府	古	歷	備考
1	川越石窯址	前山字川越石	段丘				○		佐分No550本報告
2	後沢遺跡	小宮山字後沢	丘陵	○	○	○	○		佐分No400 S51・52年度発掘調査
3	前山城跡	小宮山字前山	山頂				○		佐分No416
4	熊の下遺跡	前山字熊の下	段丘	○	○	○	○		佐分No408
5	東ヶ岡遺跡	前山字東ヶ岡	段丘	○			○		佐分No409
6	倉沢遺跡	前山字倉沢	段丘				○		佐分No411
7	前山古城跡	前山字尾垂	山頂				○		佐分No477
8	尾垂遺跡	前山字尾垂	段丘	○	○	○			佐分No472
9	洞原遺跡	前山字洞原	段丘				○		佐分No473
10	荒城跡	前山字荒林	山頂				○		佐分No478
11	市道遺跡	三塚字市道	散高地	○	○				佐分No418 S49年度発掘調査
12	鶴田遺跡	三塚字鶴田	散高地				○		佐分No414 S50年度発掘調査
13	三塚遺跡	三塚字東野澤田	散高地				○		佐分No419 S48年度発掘調査
14	中道遺跡	前山字中道	散高地		○		○		佐分No412 S46年度発掘調査
15	大門下遺跡	前山字大門下	自然堤防	○	○				佐分No486 圖場整備により消滅

16地家遺跡17城山遺跡18上の山遺跡19西の堀遺跡20小山の神B遺跡21小山の神A遺跡22長ヶ庭遺跡23高尾A遺跡24小宮山皆25町の後道路26居屋敷跡27三塚町田遺跡28鶴田遺跡29金山遺跡30一町田遺跡31三千束遺跡群32住跡33長明塚遺跡34東五里田遺跡35佐田遺跡36伊勢道遺跡37大船遺跡38舟田遺跡39西南遺跡群40下町屋遺跡

III前山焼の歴史

前山焼の創窯に関する文献資料はなく、伝承等による推定年代である。前山焼の創窯から閉窯年代については既に各説が論考せられており、ここにまとめてみることにする。

竹内治利氏は（文献1）、宇川越石の近くに「伊右衛門屋敷」という字名があり、三河から伊右衛門という陶工等数人招いて川越石で焼いたという伝承から、伊右衛門という名が寛政5年五人組帳観（1793）に記載され、忠右衛門⁽¹⁾（元文2年生（1737））全盛の折に築いたという伝承等を併せて、天明・寛政のころ（1781～1789）ではとしている。

小林多津衛氏は（文献2）、箕輪家の年譜（箕輪基氏が位牌等から資料収集し作成したもの）から、

忠左衛門幼名忠五郎作衛門吉品次男 隠居分家の祖 元文二丁巳出生（1737）

法名天聚義心居士 天明六丙午十一月十五日没 行年五十才 （1786）

忠左衛門と分家せしは十七才父五十七才の時なり、忠左衛門安永天明年間名主勤役その記名捺印の書類現存せり

の記述と、古老小山真十氏の語る、「窯を始めたのは箕輪忠左衛門で隠居分家し、……」との伝承等により、忠左衛門中年の時代とすれば明和、安永年間（1764～1781）が妥当としている。

名主をしていた関係上窯元の箕輪太七郎家に伝わる『信州佐久郡前山村家門人別御改帳之覚』によると、宝歷5年（1756）のものには忠左衛門が隠居分家し9人の下男・下女を使用しており、その盛行ぶりからいっても新事業を始められる可能性は充分もっている。

窯元に残る底部の釦書きされた壺の

「信州佐久郡前山邑 立科屋箕忠 文化四歳卯二月」

から文化4年（1807）にはもちろん開窯されていたわけで、古老の伝承等と考慮して2代の忠左衛門のうち初代忠左衛門が天明6年（1786）に没していることから、隠居分家した忠左衛門のころ築いたのであれば天明6年（1786）以前であろうと思われる。

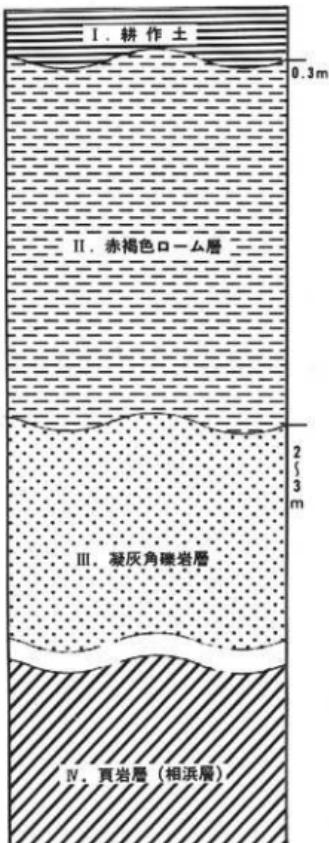
閉窯期についても文献資料はないが、箕輪政人氏所蔵の甕底部に購入した際に書かれたのではないかと思うが、

「天保九戌年 四月吉日 亾箕輪兵右衛門 信州佐久郡前山邑」

という墨書きがあり、天保9年（1838）ころまで続いていることが明らかであり、二代目忠左衛門（1775～1851）生存中には生産されていたようである。 （森泉かよ子）

注1 忠右衛門は忠左衛門である。

IV層 序



I 黒褐色土層（耕作土）

II 赤褐色ローム層

III 凝灰角礫岩層

IV 頁岩層（相浜層）

川越石窯の構築土層は、第II層赤褐色ローム層上層であり、山麓傾斜面を利用して構築している。この赤褐色ロームは、八ヶ岳火山の火山噴出物である火山灰の風化分解したもので、風化が進んだ結果、緻密で粘性が強く鉄分の多い土層である。窯体底部としては削平し、多少の加工をするのみで安定する適した土質である。

第III層は旧八ヶ岳立科火山の第一期噴出物であり、第IV層は基盤をなす洪積世初期淡水堆積の相浜層である。

（第II章1自然環境参照）

ところで、川越石1号窯址の西側低所には耕作土下に黒褐色土層が堆積しているが、（第IV章 川越石1号窯址実測図参照）これは部分的であり、川越石窯構築後の堆積によるものと思われる。

第4図 基本層序模式図

V 遺構と遺物

1、川越石1号窯址

トレントによる試掘調査であるため全容は明らかにし得なかったものの、大方の規模、残存状況等を知ることができた。

1号窯址は果樹園の西端の（西側の桑畠にも続く）北傾斜面を利用して築造され、中心軸はN-127°-Eを測り南東に向く、傾斜面と直交する方向である。構造は有段連房窯であり、2つある胴木間とその周辺部は、小屋建築の削平の際に一部壊され、また煙突にあたる西は柵木や石が積まれて影響を受けているが、胴木間・焼成室はほぼ良好な状態で残っていた。

東側焚口は削平した茂木平一氏の証言によれば20~30cm北にあったらしいが、内側下幅で36~40cmを測る直線的な焚口から胴木間部で胴張りになり、内部に角柱（約12×12×25cmの焼いたもの）の分焰柱を4本台柱の上に置いている。胴木間部は内壁に長方形の厚さ5cm程のレンガを積んであり、天井部には三角形レンガをドーム状に配置して、その外方を焼土ブロックと粘土で補強したようである。西の胴木間は奥部が残存して分焰柱がみられるが詳細は本調査に委ねた。

焼成室は第2室まで床面が確認されたが、烟地の急傾斜面で流失したのか上部の室及び煙出しについてははっきりしなかった。

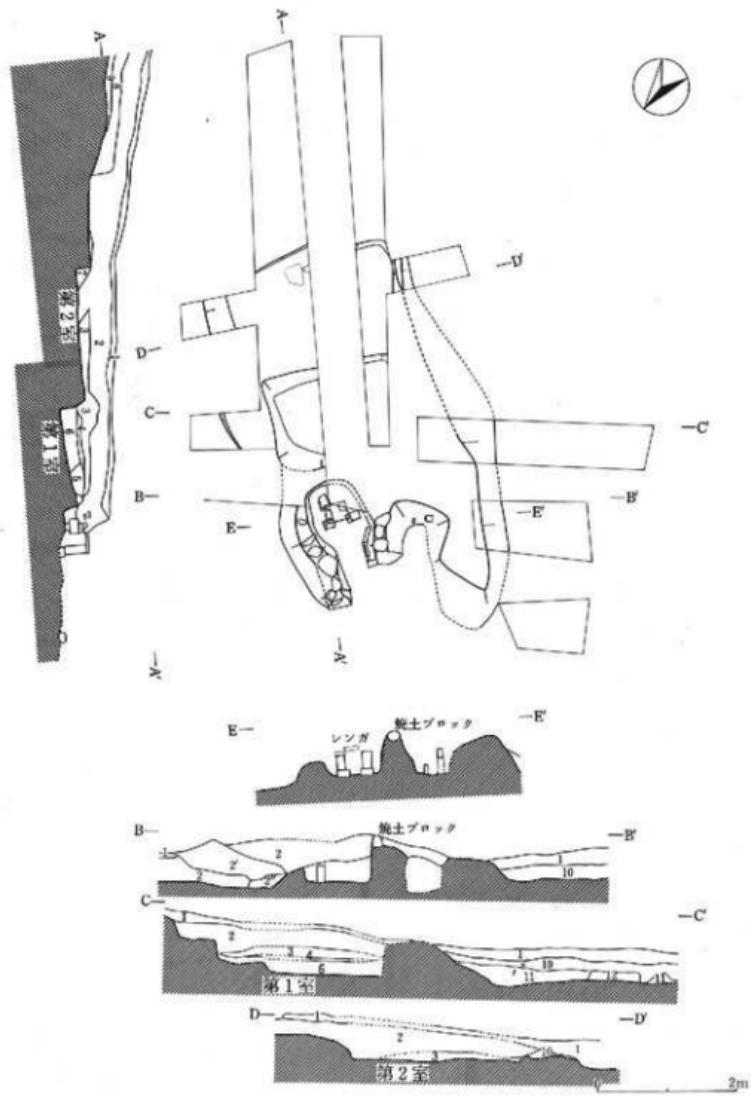
第1焼成室は奥行き140cm 幅240cmを測り、ほぼ水平である。床面には4層の灰層が残り、6層と5層で床面を構成したものと思われる。また、6層下にも4層がみられたのち、2層と類似する層があり、匣鉢等が入り込んでいる。焼成室床面を二段階に構成しているようである。狭間柱等はみられず、奥壁が全体にやや固くしまっている。

第2焼成室は奥行き150~160cm、幅240cmを測り、床面はやはりほぼ水平で、赤褐色ローム層が固められている。7層が奥壁側にあって狭間柱のかわりをなしたものかと思われるがはっきりしない。これより上室については、9層が床面の残存を示す層ではないかと思われるが、面的には未確認である。

1号窯は、胴木間から第1焼成室北側にかけては焼けて赤褐色を呈しているが、第2室あたりになると、焼けた状況はあまりなく、覆土としまり具合等の差異をもつのみである。

製品は素焼の破片が多く、焼成室内から焼台等や窯体上部の構造材はほとんど出土していない。59年度の本調査においては、窯体の上限、側道部及び室の出入口の確認が残されており、各所の詳細調査も行なわれるわけで、その結果が期待される。

（小山岳夫・森泉かよ子）

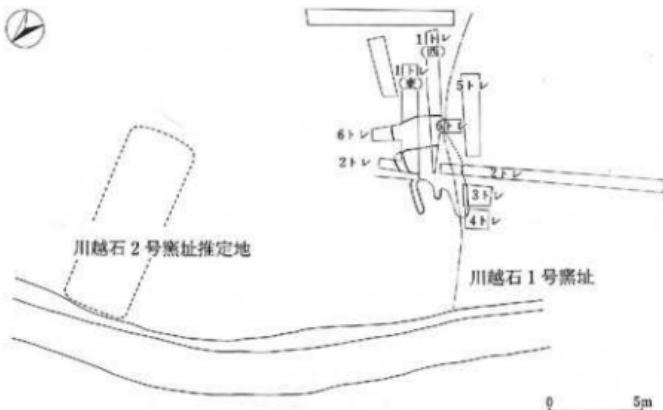


第5図 川越石1号窯址実測図

層序説明

- 1層 黒褐色土層（耕作土・有機質の堆積層）
- 2層 赤褐色ローム層（緻密で粘性の強いローム層、わずかに細かい暗褐色土粒子混入。しまりやや弱い。製品を多く含む。）
- 2'層　〃　　（多量のレンガ、構築材を含み、粘性は弱くしまりない。）
- 2"層　〃　　（流出した灰を含む。）
- 3層 暗灰褐色土層（暗褐色土層を主体とし、灰及び焼土粒子を含む。しまりなし。）
- 4層 黒色・灰色灰層（炭化物層の黒色層と灰色灰層が薄く互層をなしており、製品の破片が散いたように平面的に分布する。しまりなし。）
- 5層 暗茶褐色土層 焼けた茶褐色土に砂粒と灰がまじり、かたくしまる。床面構成層。
- 6層 2層と良く似る。しまりある層。床面構成層。
- 7層 暗赤褐色土層（ローム粒子に灰が混入し、固くしまり粘性のある層。）
- 8層 赤褐色ローム層（地山のロームが流出した土層か？、粘性は強いがしまりはない。）
- 9層 暗褐色土層（ローム粒子混入し、かたくしまる。）
- 10層 赤褐色ローム土層（焼土粒子を多量に含み、粘性が極めて強く固くしまる。）
- 11層 黑褐色土層（小石を多量に含み、粘性が強く固くしまる。）
- 12層 灰褐色土層（灰と粘土の層）

VI ま と め



第6図 川越石窯址全測図（1:300）

試掘調により川越石1号窯址の概要を知ることができ、大きな成果をあげたわけであるが、詳細は59年度の本調査による全面的な発掘調査に期待されるものである。

1号窯址の東にも、農道開削の際、推定位置において、焼けたレンガ積みがみられたことであることであり、上部の果樹園内にも焼土が浮いていることから、他に1基あることは確実である。

果樹園の所々に前山焼の製品の破片や匣鉢等が埋もれ、耕作の際拾い出されたものが山のように積まれ、回収したもののだけでみかん箱100箱以上におよび、かなりの数量である。

1号窯址についても未確認である細部の構造・上限の確認等残された課題であるが、他にも、別の窯址の存在確認、製品の製作場所、粘土を挽く水車のあった場所等の確認が残されており、前山焼の歴史的背景についてもはっきりとした資料を探し出し、より江戸時代の窯業の姿をはっきりさせて行きたいところです。

佐久地方で初めての近世窯址の発掘調査とあって、戸惑いも大きかったが、59年度の調査に向けて資料ができたことは、指導を賜った先生方や地元の方々の協力があってのことと厚く感謝しております。

(森泉かよ子・林幸彦)

引用参考文献

- 1、竹内治利 1954 「川越石焼調査報告書」(『信濃教育』708号)
- 2、小林多津衛 1969 「前山焼」(『信濃のやきもの』) 音平研究会
- 3、上原邦一 1970 「佐久の窯業」(『佐久』第25号) 佐久史談会
- 4、安藤 哲 1982 「前山焼」(『しなの陶磁器』) 信濃毎日新聞社
- 5、榎崎彰一 他 1980 「日本やきものの集成3 濱戸・美濃・飛騨」平凡社
- 6、愛知県教育委員会 1975 「かみた第1号古窯・2号古窯」
- 7、佐久市教育委員会 1983 「前山焼(川越石焼)」



1. 川越石1号窯全景



1. 川越石 1号窯址（下方より）



2. 川越石 1号窯址（下方より）

図版三



1. 川越石1号窯址（東口木間部）



2. 川越石1号窯址（上方より）

川越石塚址試掘調査報告書

昭和59年3月31日発行

編集者 川越石塚址発掘調査団

発行者 佐久市教育委員会

印刷所 株式会社佐久印刷所